



第2部 ケアのかたち ⑧ 見えない敵

感染発生、対応教訓に

を作成。利用者と職員とのPCR検査の段取りを詰め、気が付くと夜が明けていた。

午前7時にはほとんどの職員を呼び出し、関係先へ連絡。机は利用者の登録情報を記したファイルで埋まり、椅子や棚に書類を広げて電話を掛け続けた。

岡山市保健所と協議し、休業は18日までの3日間と決まった。濃厚接触者は3人とされたが、万全を期すために全利用者と職員計約140人を検査対象とした。検査会場までの綿密な送迎計画を立て、2日間で完了させた。1人でも陽性となれば再

開は先延ばしになる。18日朝までに保健所から届いた結果は「全員陰性」だった。

「再開できる」。小馬の頭にはそれしかなかったという。高齢者の孤立を防ぎ、介護や認知症予防の役割を担うデイサービス施設は地域に不可欠と自負しているからだ。たとえ3日間でも集いの場を閉じ、医療的ケアが必要な人は訪問看護に切り替えてもらい、入浴サービスも我慢させたことが心苦しかった。

風評被害を防ぐため、正確な情報発信に努めた。「すべて公表しよう」という社長判断の下、ホームページには広報文を第6報まで掲載。近隣町内会の掲示板にも添付を依頼した。それでも職員や家族への影響は避けられなかった。

ハウを得た。見えない敵と隣り合わせにある中で、この経験を必ず役立てていく。小馬は決意を口にする。

人類の歴史は感染症との闘いの繰り返しだ。超高齢時代で直面した今回のパンデミック(世界的大流行)では、介護施設の運営維持が課題の一つとして浮き彫りになった。

厚生労働省によると、2人以上のクラスター(感染者集団)の発生件数は全国で5759件(3月29日現在)。高齢者施設が1176件と2割を占め、飲食店(1064件)や医療機関(992件)を上回る。県内でも総社市のグループホームや岡山市のデイサービス施設などで発生し、休業を余儀なくされた。

利用者1人が陽性。岡山県内の介護施設では初めてらしい。

昨年7月15日のことだ。午後7時半、介護サービス業「アール・ケア」(玉野市)の取締役・小馬誠士(38)のスマートフォンに、社長の山根一人(58)から電話が入った。

80代女性＝岡山市＝の新型コロナウイルス感染が確認された。7月6日に同社のデイサービス施設「アルフィック平井」(同市中区)を利用したという。デイサービス部門責任者の小馬は電話を受けた時、会議のため同施設にいた。

耳を疑った。恐怖でしかなかった。即座に休業を決め、残っていた幹部職員2人と準備に取り掛かった。接触者を割り出すため、女性が利用した日の昼食の座席記録を探しだし、送迎に使った車も特定した。利用登録者約120人に電話連絡するためのマニュアル

利用者の新型コロナ感染が確認され、関係先への電話連絡に追われるアルフィック平井の職員＝2020年7月16日午後1時54分(アール・ケア提供)



歯科医院で受診を拒否された。公園で子どもを遊ばせると罵声を浴びせられた。保育園の子どもが保育士に「お母さんはアルフィック平井に勤めているんだよね」と言われた。

「一時的でも職員につらい思いをさせたのは課題だが、利用者への対応と早期再開についてはノウハウを得た。見えない敵と隣り合わせにある中で、この経験を必ず役立てていく。小馬は決意を口にする。

各介護施設も個別のBCP(事業継続計画)の策定を急ぐ。協議会事務局を担当する県介護支援専門員協会の会長・堀部徹(71)は「高齢者が行き場を失う事態は絶対避けたい。コロナ禍の教訓を将来の備えとしなければ」と力を込める。(井上光悦)

＝文中敬称略